

## 校長室の窓から

# 大学院入試辞書事件 ～ Sさんの思い出～



今から 25 年前、私は教員籍のまま大学院で学んでいました。

文学部出身だった私は教育学に疎く、採用されてから 10 年経ったころには、なんとなく壁に当たり、行き詰まりを感じていました。そんな時、上司から『大学院に行ってみないか』と勧められ、二つ返事で受験することになりました。

県教委の一次試験を経て、大学での本入試の日。会場に行ってみると。初任の学校での教え子 S さんが、同じ受験生として座っていたのです。うれしいのか、気恥ずかしいのかよくわからない感情のままに、教え子と机を並べて試験を受けることとなりました。

さて、懐かしい話をする暇も雰囲気もないまま、一つ一つ試験が終わった時でしょうか、次の英語の試験を待つ休憩時間のことです。私の机の上を不審そうに眺めていた S さんが、

「先生、辞書持ってます？」と聞いてきました。

「え?! 辞書? もしかして、辞書持ち込み可?」

「せんせ～要項に書いてありました。」と、呆れる S さん。

「どうしよう…。」(どうしようもないのですが。)

「大丈夫です。借りてきます。」(って、もう始まるから…)

「いや、もう始まるから、いいよ。辞書は頭に入ってるから。」(そんなわけない。)

「大丈夫です。すぐ行ってきます。」

そう言うが早いか S さんは試験会場を駆け出していきました。

しばらくして、息を切らせた S さんが帰ってきました。そして、私の机の上にさっと辞書を置くと、静かに自分の席に着いたのです。

S さんにとって大切な大学院の入試。それも一番差がつくといわれる外国語(英語)の試験直前。最後にやりたかったこともあっただろうに、それをやめて、私のために辞書を借りてきてくれました。それも、受験生失格ともいえる大きなミスをした、自業自得の私のためです。

大学院の定員は数名ですから、S さんと私は、少ない席を争うライバルでした。実際、その年合格したのは 3 名。もし、私が脱落すれば、S さんが合格する確率は格段に上がる。そんな状況でも、S さんに迷いはないように見えました。

後に聞いたところでは、S さんは、後輩がいる国語研究室に「英和辞書～!」と叫びながら走りこんできたとのこと。いつも落ち着いている S さんでしたから、そんな慌

てぶりを見た後輩たちは、よほど面白かったのでしょう。私と S さんが研究室を訪れた時、面白おかしく、身振り手振りでのその時の様子を話してくれました。そんな中、ある後輩が S さんをからかうように「英和辞書～!」と叫ぶ様子を見て、思わず爆笑してしまったところ、すかさず S さんが、

「先生には笑う資格ありません。」とぴしゃり。

「だいたい、誰のために叫んだと思ってるんですか。」

笑いの中で、矛先はぴつたりと私に向いていました。

まったくもって、おっしゃる通り。誠に申し訳ない。

それから S さんと私は、同じ教授の下につくこととなり、同門の「同級生」として 2 年間、実に楽しく切磋琢磨しました。

私の教師生活の中で、唯一人の同級生である教え子 S さん。彼女は大学院を卒業すると教師の道に進み、今は県内の高等学校で重要な役を任されています。間違いなく、恩師の一人である私を反面教師としながら。

10 年ほど前、S さんとばったりと会うことができました。その時、「大学院入試辞書事件」のことを覚えてるか尋ねてみると、

「そんなこと、ありました?」って、笑顔。

忘れたふりか、本当に忘れてしまったのか、どちらにしても、憎たらしいくらい、やっぱりさすがの S さんでした。

ちなみに、その時の英語の問題は、英訳された漢籍を和訳しなさいというものでしたが、元になった漢籍をほぼ覚えていた私は、せっかくの英和辞書をあまり必要としませんでした。と、そんな風に妻に自慢すると、「そういう問題じゃないでしょ。まったく。反省が足りん。」と、とんだやぶへびとなってしまいました。